

双子

私は知らずに抱かれてしまいました
どうして見分けることができたでしょう
この身体の中に住む双子を
全く見分けなどつきません、私でなくとも

私が抱かれたのは歓喜ではなく
きっと恐ろしい悲歎に違いない
ああ、何という苦しみ
しかし、何という恍惚

ああ、この男は本当に悲歎なのか

歓喜には倦怠が宿り
悲歎には慰めが宿り
どちらにもただ、瞬時の興奮しかなく
あとは果てしのない生活の砂漠
どちらに抱かれても同じことです

私の肌を這う唇はどちらも荒々しく
欲望だけをむさぼっている
彼の背に回した私の10本の指には
おぞましさと快楽に力が入る
もう彼がどちらだろうと構いません

(1982.8.3)